

「日中社会の死生学」

立命館大学先端総合学術研究科 二〇二四年度採択された院生プロジェクト 研究会

R RITSUMEIKAN

本研究会は、社会学、哲学、文化人類学、宗教学など複数の専門分野から集まった五名のメンバーで構成されている。さらに、ゲスト・メンバーとして学外からの五名の若手研究者が加わっている。



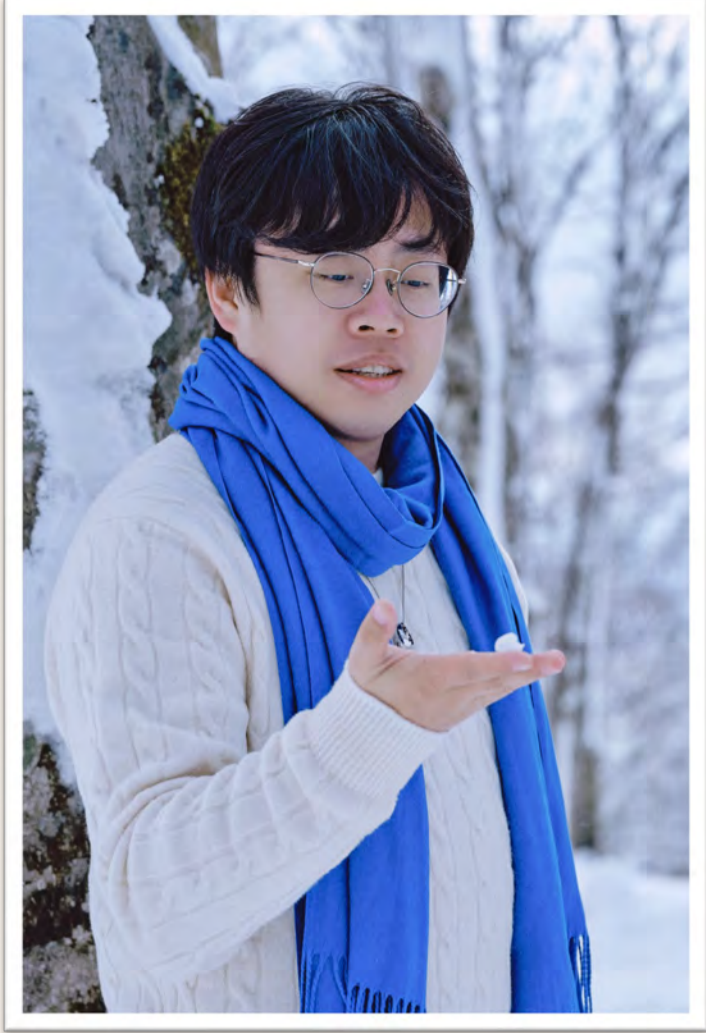
岳 培荣（立命館大学先端総合学術研究科一貫制博士課程共生領域）

研究テーマ：日中社会の病院、葬儀社、火葬場、霊園など、死に関わる場所を訪れ、フィールドワークを通じて、現代社会の死の扱われ方について探求しております。



王 雨楊（立命館大学先端総合学術研究科一貫制博士課程生命領域）

研究テーマ：中国のターミナルケア事業の発展プロセスと文化に基づいて中国のターミナルケア事業現状と直面している問題点を明らかにします。



範 宸宇（立命館大学先端総合学術研究科一貫制博士課程共生領域）

研究テーマ：中国仏教系老人ホームにおける終末期ケア - 「阿姑チーム」の果たす役割の重要性の観点から。



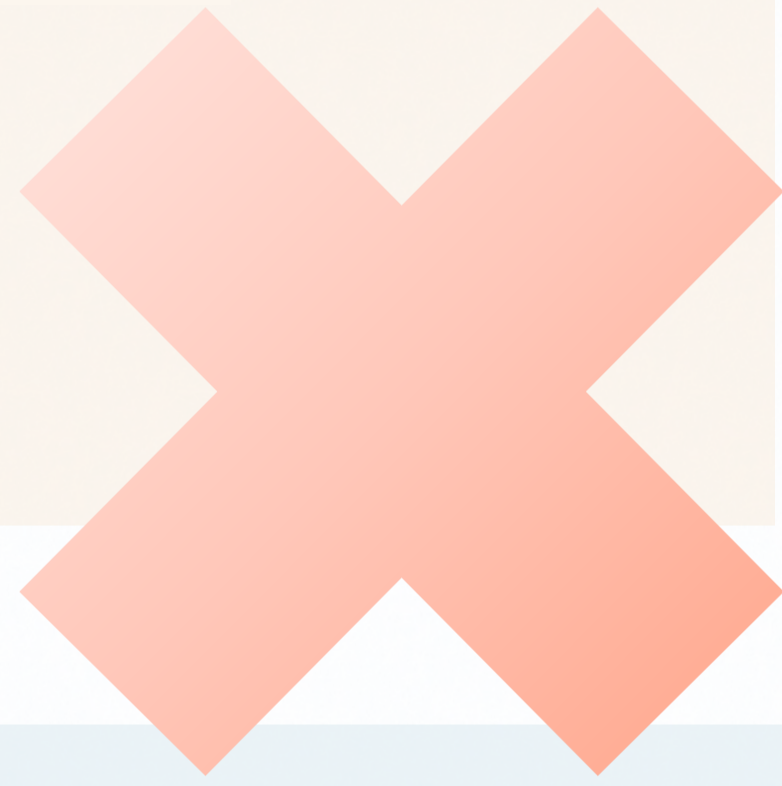
談 拉成（立命館大学先端総合学術研究科一貫制博士課程表象領域）

研究テーマ：私はアクションゲームにおける死亡の機能を研究しています。具体的には、ゲーム内の死亡がプレイヤーの戦略や操作にどのような影響を与えるかを分析することです。

吳 海鷗（立命館大学先端総合学術研究科一貫制博士課程共生領域）

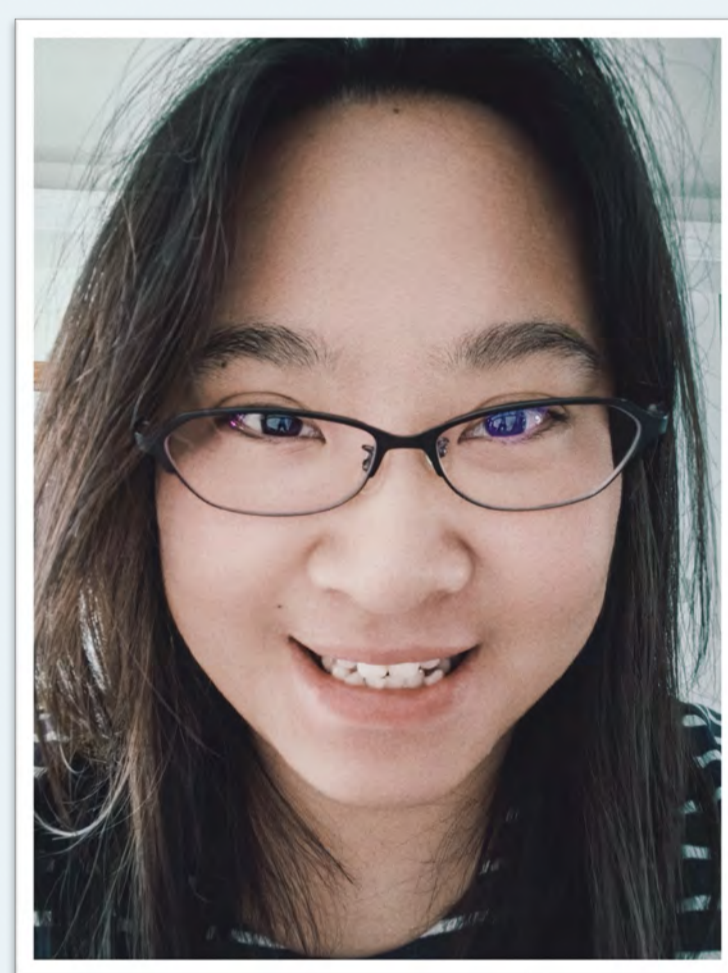
研究テーマ：「物尽其用：中国における古着の輸出貿易と国内取引市場の可能性」中国の古着貿易の輸出ネットワークに着目し、物質が豊富な時代における人と物の関係の新たな可能性を探ります。

R
RITSUMEIKAN



*教員責任者：阿部朋恒 院生代表者：岳培荣 (gr0505xf@ed.ritsumei.ac.jp)
*今後予定について。①定期読書会：水曜日14:30-16:30、二週間に一回。②2024年末には、日中両国の死生学研究者（中国2名、日本2名）を招き、オンラインで日中社会の死生学研究シンポジウムを主催する予定。

高齢化が進行する中、中国は年間死亡者数が増加し続ける「多死社会」へと移行しつつある。感染症による大量死、高齢者ケア、社会保障、終末期ケア、葬儀など、死に関連する議論は重要性を増している。本研究会は、先端研の「中国社会における死」に関する研究を行っている院生を集め、定期的に読書会や研究成果報告会を開催し、積極的に国際交流も行うことで、共同研究を促進することを目指している。これにより、各メンバーの研究水準の向上とともに、日本における中国社会の死にまつわる研究のトレンドを創出することが期待される。



唐 沈琦（中国復旦大学社会発展公共政策研究科人類学民族学研究所博士後期課程修了、復旦大学中国歴史地理研究所博士研究員）

研究テーマ：「上海」を動的かつ連続した歴史的地域と見なし、通時的な視点で、現代上海における遺体に対する観念を考察しています。



研究テーマ：中国都市部の葬儀業における新しい儀礼空間・サービスの創出とその実態から、死者に対する生者たちのさまざまな実践と思いを捉えることを目指します。

陳 旻（筑波大学人文社会科学部研究科歴史・人類学専攻博士後期課程）

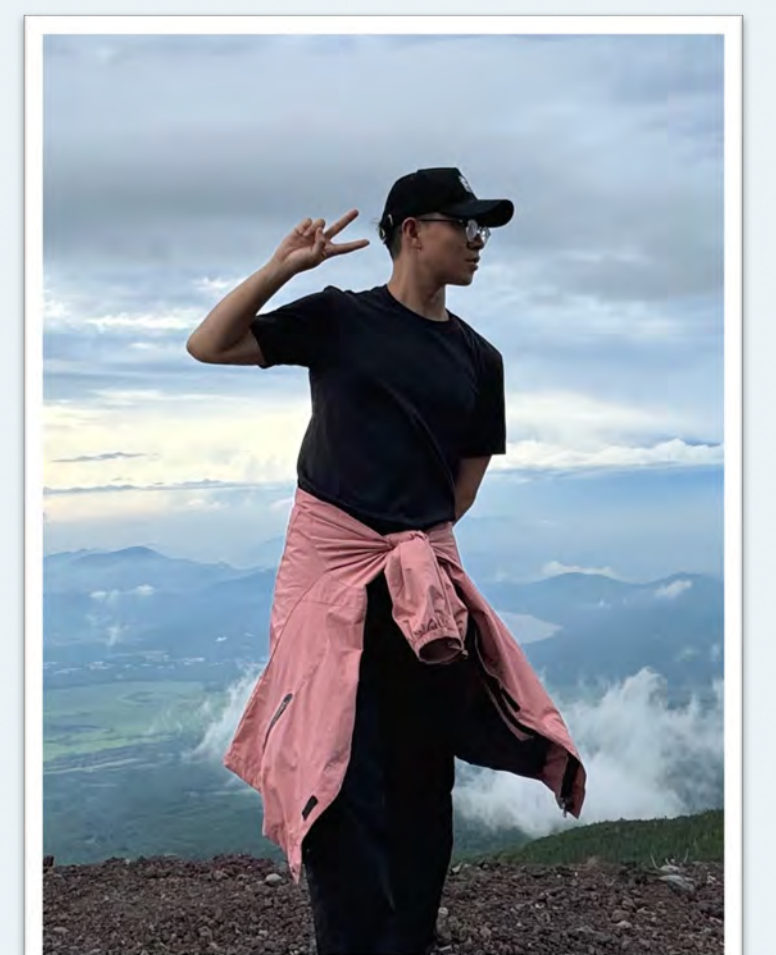


吳 薇（東京大学人文社会系研究科死生学応用倫理研究室博士後期課程）

研究テーマ：中国におけるSNS時代の病いの文化と死生観。この研究では、新型コロナ時代の中国における病いの文化と死生観の様相に焦点を当て、特に感染症としての新型コロナがどのように「文化化」されるか、そして人々が未知の疾患やリスクに対応し、日常と不安のバランスを取る可能性、および死と密接に関連する疾患において「生」に関する認知と知恵をどのように構築するかについて論じます。

范 玉愷（筑波大学人文学学位P哲学・思想SP宗教学分野博士後期課程）

研究テーマ：道教死者救済儀礼に関する歴史学・宗教学的研究。道教の死者救済儀礼の一種である鉄罐・玉陽施食煉度儀礼を中心にして、その文献から実践まで、歴史的・宗教学的研究を展開しています。



徐 天愛（中国中央民族大学民族学および社会学研究科人類学博士前期課程）